新春　博物館長が語る

中世の土浦
―土浦藩成立以前の風景―

▲若泉山扁額

▲若泉山安養院本堂（本庄市指定文化財）

市民の皆様、新年明けましておめでとうございます。

私は昨年4月、両館兼務の館長を拝命致しました。筑波山麓に生まれ、以来70年余、土浦は私の生活空間の大切な一部です。はからずも館長に就任し、学校とは異なる研究現場で不慣れながらも越年しましたが、この間、館長講座や館員の皆様との深密な交流を通じて自分の役割を多少は感じ取れたようです。

さて年頭に当たり、私の所感の一端を申し述べてみます。私の研究分野は江戸時代以前、平安時代以後であり、戦後では特に日本中世史などとも言われます。

この分野から土浦を見てみましょう。すでに『土浦市史』（昭和50年刊）などで詳しく土浦の歴史が語られるなか、ふと思い浮かぶことは、現土浦市（旧土浦町）のどこにも土浦なる地名が見当らない、という点です。私にとっては誠に不思議です。皆様はこの現実をどのように思われるでしょうか。

つまり、土浦の地名の由来がわかりません。当り前のように、〝ここは土浦である〟との前提が問われるのです。

これまでに、例えば京都駅近傍の古刹（こさつ）である東寺（とうじ）、正式には教王護国寺（きょうおうごこくじ）に伝来する東寺百合（ひゃくごう）文書の中の鎌倉時代（元徳元（1329）年）の文書には「土浦（郷）」が確認できます。これは東寺に絹代の銭を年貢として納入する義務を負った東寺領常陸国信太庄（ひたちのくにしだのしょう）の一区としての「土浦」という地名の初見（しょけん）といえます。ちなみに信太庄とは

糸賀　茂男

土浦市立博物館館長
上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長
常磐大学名誉教授

研究分野は、常陸平氏や真壁氏、小田氏などの中世史。これまでに茨城県文化財保護審議会会長（茨城県）、国指定史跡真壁城跡整備検討委員会会長（桜川市）を歴任。永年の研究の功績を讃えられ、昨年11月、文化財保護の分野で地域文化功労者表彰を受賞。

旧常陸国信太郡(旧土浦町・阿見町・美浦村・旧江戸崎町・旧東村)の江戸崎以西の一帯に相当し、鎌倉時代の末葉(文保二(1318)年)に一括して東寺支配下の寺領(当該地から様々な種類の年貢もしくはその代銭を徴収して経営の資財に当てる役割を担った)となりました。

さて、この土浦とはどこか、どの一帯に相当するのか、実は不明なのです。思えば、鎌倉期の土浦は、仮に現在の土浦市街地およびその周辺を想定しても、桜川(古くは筑波川)河口の大湿地帯・デルタ地帯であったのです。ではここには通常の農村風景は無かったのか、大いに苦慮する研究の局面です。

そこで次にこの難題を解く一つの事例を紹介してみます。それはすでに『土浦市史』などでも指摘されていることですが、永享7(1435)年に土浦郷に居住している「若泉三郎」なる「富有仁」の存在です(「鹿島大祝文書」)。富有仁とは、〝富裕の人〟、つまり豊かな財産の所有者です。その明瞭な所在地や屋敷構えは全くわかりませんが、その名からもこの地域の武士、領主でしょうか。そしてその系譜は、という時に思いつくのは武蔵七党(武蔵国の武士団)の中の若泉氏です(埼玉県本庄市内に〝若泉〟という地名がある)。児玉党(武蔵国北方の児玉郡内の武士集団)に属する若泉氏は、実はこの若泉三郎の数代前の若和泉太郎次郎が他の武蔵武士とともに北畠親房など南朝勢攻略のため小田城およびその周辺を転戦しました(別府文書「別府幸実軍忠状」康永3(1344)年)。あるいは若泉三郎の子孫と思われる若泉五郎右衛門は戦国期に小田氏家臣菅谷氏によって土浦を奪われた、との伝承も併せ考えるとき、朧げながら若和泉太郎次郎の論功行賞としての土浦拝領以後、戦国に至る間の若泉氏による土浦在住が想定されるのです。あわせて若泉氏による瀧泉寺、不動院開創伝承にも注目したいです。

大湿地帯のどこにその居所あるいは館があったのか、中城(条)か、東崎か、はたまたその勢力の規模は。これらは中世史上の土浦研究の難しくも楽しい課題です。

今年3月半ばから博物館特別展『土浦城―時代を越えた継承の軌跡』が始まります。そこでも若泉氏に迫ります。

どうか皆様、ご来館の上で中世の土浦にも思いを馳せて下さいますように。

結びに私の年頭愚詠です。

香澄立つ　浦辺の里の初日影

筑波川なる　水面にそ映ゆ

▲補陀落山瀧泉寺(中央二丁目)

▲中城山不動院(中央一丁目)